
とある少女は強能力者(レベル3)

桜 みずき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある少女は強能力者（レベル3）

【Nコード】

N6228T

【作者名】

桜 みずき

【あらすじ】

ごく普通の少女、神坂^{こつか} 玲奈^{れいな}の物語です。タイトル通り強能力者（レベル3）です。

あと、基本オリキャラでの構成になってしまいましたが当麻さんはちよくちよく出てきます。まだ出てきませんけど…。

最後に、ケータイからの投稿なのでパソコンからは多少見づらいと思いますが、読んで頂けたら光栄です。

原作との関与を考えていたのですが、頭が悪い故に無理だと悟り

ました…。

ブログと思われるもの（前書き）

文章力があまり無いので、読みづらいかもしれませんが、これから
よろしく願います。

ブローグと思われるもの

とある日のこと。

日が暮れ始め辺りが暗くなってきた頃に少女は困り果てていた。それと同時に恐怖感も覚えていた。理由は簡単だ。柄の悪い不良達に絡まれてしまっていたのだ。

「嬢ちゃんかわいいじゃ〜ん。俺らと遊びに行こうぜ〜」

語尾を伸ばすといういかにも古臭い喋り方をしながら少女に話しかける不良A。

「一緒にゲーセン行こうぜ。ゲーセン。そこの路地裏から行けば近いからさ」

いかにもついていったらそこでアウトな発言をする不良B。

「何だよ！見てんじゃねえよ！！」

「ぶっ殺すぞ！！」

通行人に罵声を浴びせる不良Cと不良D。

その所為で行く人行く人が見て見ぬフリをしてその場を少し速足で去って行く。

（何で…何で助けしてくれないの？誰か…誰か助けて…！！）

少女は心の底から思った。

「お！神坂^{しんぱか}じゃん！三時間ぶり〜」

そこに一人の少年が介入してきた。しかも笑顔で。空気とか気にせず。

「んだよてめえ！邪魔してんじゃねえよ！」

そう言っつて少年の胸倉を掴み、近距離で睨みつける不良D。そして、少年を囲むように近づく不良ABC。

しかし少年は至つて平然にこう言っつた。

「そうカリカリすんなつて。カルシウム足りてないんじゃない？あと、ちゃんと歯磨け。息くせえよカ〜ス」

「んだと…！！」

少年の言葉に不良Dの怒りが頂点に達した。不良Dは少年に殴りかかる。

「ダメだなあ〜。後も気にしなきゃよ（……………）」

少年がそう言つた刹那、ゴンツ！という音が響く。音の発生源は不良Dの頭からだつた。その場で意識を失い、倒れる不良D。

「〜。やるねえ」

口笛を吹きながら少年は絶賛する。それと同時に不良ABCは驚きを隠せなかつた。

「な、何だよアレ!!」

不良Cは言った。

そこに在るのは鉄パイプ。しかし、在り方が異常だった。不良Dを殴り倒した証拠に多少のへこみを残し、宙に浮いていた(……。

……。

「え、えと…さ、先程はありがとうございました!」

少女は深々とお辞儀をし、感謝の気持ちを少年に伝えた。

「あゝもう! だからその他人行儀みたいな喋り方やめろって! なんか距離感感じるんだよ」

しかし、喋り方に不服があるらしく、少年はその場で嘆いた。

「で、でも…出会ってまだ二日ですし、口の悪い人は嫌われてしまうので…。葉空（ようぞら）さんがそう言うのでしたら多少崩した方がいいのですか?」

そう。少年…もとい葉空とは、この春めでたく合格出来た高校のクラスメートであった。葉空とは席が隣になり、クラスのファーストコンタクトも葉空とだった。

「うん。そう。俺くらいまで崩して大丈夫だ」

「わかりました。次回からそうしますね。では、時間ですのでまた明日お会いしましょう」

「ああ。また明日な！」

そうして葉空は帰路へ着いた。

.....

別れを交わし、やっと目的の古本屋に着いた。

「あゝっ!!！」

そこで少女…もとい神坂はある事を思い出す。

「鉄パイプ戻すの忘れてた…。ま、まあ大丈夫…だよ。うん」

気を取り直し、古本屋へ入って行く神坂であった。

一方、葉空は。

（神坂の能力を聞き忘れたなあ…。やっちゃったよ…。……自分が嫌になるな。）

なんかものすごい後悔をしていた。

「ああゝ！気になるうゝ！」

街中ということ忘れて無駄にテンションを上げて言ったので、
白い目で見られることになった葉空だった。

ブログと思われるもの（後書き）

新規登場人物？

・神坂 玲奈 こうさか れいな

・葉空 蒼衣 はやぞら あおい

始めまして『桜 みずき』です！まだまだ素人ですが頑張っていくので応援よろしくお願いします！誤字・脱字などがありましたら感想欄などでの指摘お願いします。

次話からはナレーション（地の部分）は神坂さんになります。

第一話「台風の中心って快晴だと思っけど、よくよく考えると大雨だよね」(前

サブタイトルと本文に何の関係性はありません。読んで頂けたら光栄です。

ああゝ文才欲しいゝ…。

第一話「台風の中心って快晴だと思っけど、よくよく考えると大雨だよね」

皆様始めまして。神坂 玲奈です。今はとある学校の寮の自分の部屋に居るのですが……冒頭からピンチです。なんとっ！冷蔵庫の中身がすっからかなのです！

「ハア~~~~~」

私は長〜い溜め息を吐き出し、渋々テレビの電源を点ける。

昨日、本屋行くついでに買おうと思っていのに買い忘れてた。

私の腹は果して夜まで持つのか心配だ。

『昨日の午後7時頃、一二学区の古本屋付近で傷害事件が発生しました』

「へえ〜。近所だし怖いな〜」

適当にニュースを聞き流す私。

それにしても7時頃なら私が不良さん達と交戦してた頃とかぶるな〜、と思いつながらニュースを聞き流して制服に着替えようとした瞬間、第二の不幸が降り注いだ。『被害者の男性四人は、いずれも現場の近くにあった、鉄パイプで殴られた（……………）』
ようで、内一人は意識不明の重体。三人は頭を7針縫う大怪我で、念動力の類の能力者の犯行とみて捜査を進めています。続いてのニュースで——」

ブツン！

「さて、着替えて学校行こ」

学園都市って意外に狭いね。いいや、諦めて開き直ろ。

服を着替え、靴を履き、玄関から外へ出た瞬間――

「おいっす。神坂おはよ」

バタンツ！ガチャリ！

あれ、何だろう。幻覚？何で葉空さんが部屋の前に？わからない。
よしっ！もういつかい出て見よう。

ガチャ！キィ……

「神坂お――」

バタンツ！ガチャリ！

あ！ここ二階だった！窓から出れば問題無いよね。

私はすぐに行動に移し、器用にベランダから飛び下りた。

………

「うう、神坂に無視された……」

「本当にごめんなさい！ちょっと酷かったよね」

今朝のことについて謝っています。人間が精神的に最もダメージを受けると言われている、無視をしてしまったので心から罪悪感が湧き出てくる。

「ホントにそう思ってる？」

「うん。もう無視しないから大丈夫だよ。機嫌直して。ね？」

「うん。そうする」

ガラッ！

教室の扉が開けられ教科担任の先生が入ってくる。

「ほんじゃ授業始めるぞ」

委員長が「起立、礼！」の号令をする。

今日も何もなく無事に家に帰ればいいなと想い、授業に取り組む私だった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

神様は幸せを全ての人に平等に与えてくれている。否。それは幻想に過ぎない。現に私には何も幸せを与えない。幸せを見つけるチャンスを与えない。神様は不公平だ。だから私はこんなめに遇うんだ。そう、こんなめに……！

「なんで購買部が無いんだー！！」 注）私です。

私のお昼……。次の授業、体育なのに…。

「神坂さん…大丈夫？」

クラス委員長の真枝^{まえた} 実乃梨^{みのり}さんが、私を心配してくれる。さすが委員長クラスの人の気配りは欠かさないね。

「真枝さん…お昼が…食べたいです…！」

とある名場面の一部を抜き出しもじる。

そこで女神の如く真枝さんは私に救いの手を差し出してくれた。

「それなら、私のお弁当一緒に食べる？」

「いいんですか！？ありがとうございます！！真枝さん！」

そう言えば葉空さん見ないけどどうしたのでしょうか？まあ、いつものことなので放って置けば大丈夫でしょう。

委員長の前の人の席を借りて座る。こういう行為（他人の席に座る）は初めてなので落ち着かないな。

「わあ！おいしそう！」

委員長がお弁当を開くと、それはそれはおいしそうな料理がいっぱい…。

「ありがとうございます。褒めて頂いてとても嬉しいですよ」

はい。とってもおいしそうです。おいしそうですね……。
くそう…ツツコミたい…。ツツコミたくてしょうがない…。なんで
…なんでおかずが卵焼きだけなんですかー！？

「私、卵焼き大好物なんですよ。神坂さんはどんなお料理が大好き
なんですか？」

このお弁当の中身を見れば、卵焼きがどのくらい好きかひしひし
と伝わってきますよ。真枝さん。

「私の好きな食べ物ですか？ん…」

じつくりこっけてりまったり考える。

チツチツチツチッピン！！

「無いですね」

「無いですか…」

ぐう~~~~~

神様…生理現象とはこれは無いです…。

「神坂さん。ご、ご飯食べましょうか…」

「う、うん…」

顔中真っ赤にして真枝さんのご飯に食らいつく私でした。

味？もの凄くおいしかったよ！

第一話「台風の中心って快晴だと思うけど、よくよく考えると大雨だよね」(後

新規登場人物？

・真枝まえだ 実乃梨みのり

まったりゆったりだらだと学園生活を書いていきます。ここまで読んで頂いた方、これからも応援よろしく願いします！

第二話「私はチースケーキが大好きです！」（前書き）

かなり間が空いてしまいました！すいませんでした！以後気をつけます！

ちなみに、サブタイトルと本文は全く関係ありません！

第二話「私はチーズケーキが大好きです！」

お昼休み終了と同時に葉空さんが教室へ戻ってきた。

「どうしたの？急に居なくなったから何かあったのかと思ったよ」

なんか顔が曇よりしていたので心配して声をかけてあげた。

「あれは…例えるなら……そう、鬼だな。英語で言うとデーモン」

「何があつたの！？鬼に遭遇したの！？」

「違う！あれは俺が悪いんじゃない！嘉秋よしあきが悪いんだ！」

葉空さんが必死に何かを訴える。よほどのことがあつたのだろう。

「だから何が——」

「俺は覗き魔じゃねー！！」

葉空さんが大きな声で悲痛な叫びを訴えた。

『ピンポンパンポーン』はあゝいゝみんな元気ゝ演劇部部长兼放送部部长ゆいさき みちるの結咲理琉ゆいさき みちるでえゝす！！』

葉空さんが叫んだ後に今年度二度目の臨時放送サバイバルが流れた。

『今日のターゲットはゝジャカジャカジャカ………』

□でのBGMはどうにかならなかったのかな？

『ジャカジャカジャン！！1 - B 葉空蒼衣と1 - D 山無嘉秋
でえゝす！！頑張つて逃げちゃって下さゝい！！さて、捕まえる側は
ゝレベル3以上の女ゝ子！かつこ私も含ゝむ！！やらない人はパス
でいいですよゝ！逃げる人以外！！』

「逃げる人差別だゝ！」

葉空さんが抗議し始めた。当たり前だけど…。

『違います！葉空さん。これは命令です！！やれ！！！！』

放送と会話が成り立った！？

「横暴だゝゝゝ！！！！」

『それでは皆さんルールの確認をしますので、一度校庭に集まるこ
と！ちなみに5分以内で。間に合わなかったら、……焦がすよ？』

かなり怖いですよ部長！

かくして、8人あまりの生徒がグラウンドにむかった。

そりゃもう全速力で。

.....

ここからは葉空視点でお届けします。

「よっ！早かったね〜！そんなに私に会いたかったかな〜？」

『結咲先輩が遅かったんです！！』

自分で5分以内で来いと言つといてそりゃねえよ先輩…。何でそう言つた30分後にくるんだよ！

「てへっ 遅れちゃった！」

「『てへっ 』じゃね——ないですよ！』てへっ 』じゃ」

先輩反省してねえっ！！

「葉空はほつといてルールの説明をしますよ〜」

「ひでえ！？」

「これからやつてもらふのは……『学園都市鬼ごっこ』ですよ」

「ネーミングセンス悪すぎワロ——ぐぶっ！！」

結咲先輩をけなした嘉秋は口から泡を吐いてぶっ倒れた。

何があつたかは怖くて言えない…。これから注意しよう。うん。

「ルールは簡単。鬼ごっここの範囲が学園都市全体になっただけ。開始時刻は4限終了時のチャイムがなったら。ちなみに山無は特別ルールでもう捕獲した事にします。異論は？」

『ありません』

皆口を揃えて言う。

「ちなみに、逃げる側だけ人質を捕まえても構いません。最後に質問は？」

『ありません』

人質つてオイ…。

「それでは葉空。4限のチャイムがなるまで猶予を与えます。逃げなさい」

「それじゃお先に」

そう言い残して俺は走り去っていった。

この時、俺はこの日が俺の運命を大きく変わるということはまだ知らなかった。

.....

やんやんよにし〜てやんよ〜

あ、ケータイ。誰から？ケータイを見る。

『神坂 玲奈』

俺のテンションは最高峰に達した。

「もしもし！？神坂？」

「……クロス！」

そして、俺のテンションは海に沈んだ…。

キンコーンカーンコーン！

そして、サバイバルは始まりを告げた。

第二話「私はチースケーキが大好きです！」（後書き）

新規登場人物？

・結咲理琉 ゆいさき みちる

・山無嘉秋 やまなしよしあき

神坂さんのクロス発言は次話明らかになります！それと、能力も明らかになります！ちなみに、長くなりそうな気がします。500～1000字くらいですけどww

第三話「最近、友達とケーキバイキングに行きました！」（前書き）

更新予定を大幅に過ぎてしまつて失礼しました！すみませんでした！

ちなみに、サブタイトルと本文の関係性は皆無です！ゆっくりまったり読んで行つて下さい！

第三話「最近、友達とケーキバイキングに行きました！」

葉空視点はまだまだ続きます。

「とりあえず何処かに隠れるか」

4時限のチャイムがなってからかれこれ30分が経つ。

このまま逃げてると見つかってしまう。俺は強能力者ではあるがそんな強くないし、女子に傷をつけたら男子としてヤバいと思う。

「みいゝつけた！」

後ろで声がした。そして、肩を捕まれた。

正直ホラーです。怖すぎます。いや、マジで！

「あ、先輩。こんちわゝつす…」

後ろを振り向いたら結咲先輩が居た。

「こんにちは葉空♪」

「……………」

くそっ！1ミリでも可愛いと思ってしまった俺は相当なバカだ！

「どす黒いオーラが出てます！抑えきれてませんよ先輩！」

「そついえば葉空？このまま逃げ続けてどうなるの？」

「へ？それは……」

勝つため、と言おうとしたがこのサバイバルのルールを思い出した。

『鬼ごつこの範囲が学園都市全体になっただけ。開始時刻は4限終了のチャイムが鳴ったら。』

『ちなみに、逃げる側だけ人質を捕まえても構いません』

あ、今気付いた。

「先輩。この鬼ごつこの終了条件は何でしたっけ？」

「え？サバイバルの終了条件？私達が葉空を捕まえただけど？」

「ほ、他には？」

「無い」

先輩が満面の笑みで言いやがった。

つまりは、アレだ。最初から俺に勝ち目は無いんだとよ。

「葉空は知ってる？」

「何をですか？」

唐突な質問を質問で返す俺。

「私の超能力は『マルチパーソナリティ多重人格』て言うんだよ」

「能力の発動と同時に人格が変わってね、レベルにの数だけ人格が1つ増えて力と身体能力も上がっていくんだよ」

「なんで俺にそんな事を？」

はなはだ疑問だった。今の時点では敵同士なのに手の内を明かすのは何故だ？それだけ絶対的な自信があるのか？

「んゝ…冥土の土産かな？後ろの人に勝てなさそうだし」

「葉空さんみゝつけた…」

またしても後ろから声をかけられた。俺って隙アリアリだな。

・・・・・・

神坂さんの視点に戻します。

やっと見つけた！

とりあえず葉空さんは一度ずたずたにしないと気が済みませんね！

「葉空さんみゝつけた…」

そう言つと葉空さんはこっちを向いてくれた。そして振り向いた瞬間、葉空さんは凍りついた。何故なら今の私は…！

「な、何をそんなに怒っていらっしやいますのでしょうか神坂様！
？可愛い顔が台なしですよ！！」

「葉空さん。貴方は今日の1時限と2時限の休み時間、何をしましたか？」

「な、何もしてないな〜！運動着を着替えてたな〜…」

シラを切るつもりですか…。しょうがないですね。

まあ、読者の皆さんも察しの通り2時限目は体育でした。

「私の着替えを覗いてたんですね…。先輩から聞きましたよ………」

葉空さんがガクガクブルブルと震えています。可愛いな〜。

「そ、そんなの嘘に決まって　　ひぐっ！！」

ドガンッ！！

葉空さんの足元が音を立てて陥没する。

「そ、そうだ！神坂に聞きたい事が有ったんだ！」

「何ですか？」

「神坂の能力って何なんだ！？それ以前に本当に強能力者なのか！
？どうやったら鉛筆を投げただけでコンクリを穿つ事が出来るんだ
！？？？」

普通の質問。まあ、答えてあげてもいいよね。

でも、その前に……。

「葉空さんの能力は私にはほぼ無力ですよ？」

一度は言ってみたかった一言。

「『エアロコントロール風圧調整』でしたっけ？風圧を自分で調整出来るんですよ？」

私は葉空さんに分かるように鉛筆を投げた。当たり前のように葉空さんは能力を使い、鉛筆の勢いを殺した。そのまま力を失い地面に落ちる。

「どう言う意味でそう言ったのか解らないけど、鉛筆は届いてないぞ？」

「ちゃんとした根拠はあります。私の能力は……『メカニックスルール力学支配』て言うんです」

私は続けた。

「私の能力は『念動力』と『絶対等速』の合成みたいな能力なんですよ……」

そう言ってまた鉛筆を投げた。

第三話「最近、友達とケーキバイキングに行きました！」（後書き）

裏設定？

・神坂さん…実は恥ずかしがり屋

・結咲先輩…生徒の中で一番頭がいい

・葉空さん…神坂Love！（え？知ってる？

前書きでも謝りましたが、更新遅れてすみませんでした！！

それにしても神坂さんが書く度にキャラ崩壊していくのは何故でしょう？

今回は遅くならないように頑張ります！応援よろしくお願いします！

第四話「1円硬貨の原価って約6円なんですよ！知ってました？（前書き）」

テスト期間突入してしまい、更新が少し遅れ気味です！すいません！

ちなみにこの学校の時間割は私の学校のをもじってますので一日に体育が2回ある曜日がありますww

第四話「1円硬貨の原価って約6円なんですよ！知ってました？」

再び葉空さん視点に戻ります。

懲りずに神坂が投げってきた鉛筆を落とそうと風圧の壁を作る。鉛筆はそのまま地面に落ちた。

「何度やっても同じだ」

「それはどうかな」

またしても投げてきた。

俺はすかさず風圧の壁を作る。

確実に防いだ　　が、

「　　っ！！」

頬に鉛筆がかすった。

「鉛筆が……落ちない……？」

「言ったでしょ？念動力と絶対等速の合成みたいな能力って」
そう言って神坂は続けた。

「私は最大12kgの物まで自在に操る事が出来るの。そして、目に映る物なら触れなくても操る事が可能なの。実際の念動力者より性能が落ちてる代わりに、操る物の形を自由に変え、且つ物質その

ものの強化、弱化も可能」

「なるほど。それだと神坂の鉛筆がコンクリを破壊したり、地面を穿ったり出来る事と合点がつかない。それと、絶対等速の能力もおまけで付いて来る訳か」

「そう。だけど、絶対等速はやっぱり私が投げた物限定。だから『ほぼ』無意味って言ったんだよ。いつでも絶対等速が使えるわけじゃないし」

だいぶ使いやすい能力ではあるが、各々の能力が規定値より弱化してるのが痛手か。僅かではあるが神坂には勝てそうだ。

「じゃあ、ここで終わりにしようか」

そう言う神坂は左手に持ってた小さめのバグを空高く投げた。

おそらく能力を使って少し飛距離を稼いだらう。

そのバグから鉛筆が落ちてきた。そりゃもう何本も。

「キャッチ！」

投げたバグを綺麗にキャッチし、正面から俺を見て一言。

「チェックメイト」

目の前には何十何百の鉛筆が宙に浮いていた。全てが俺に向いて。

「最後に何か言いたいことある？」

「神坂……着替えを覗いてごめん!」

そう言った瞬間、鉛筆と言う名の凶器が俺に向かって降り注いだ。
当然のごとく、意識はシャットダウンしましたとも。

・・・・・・・・・・

神坂さん視点に戻ります。

「起きて〜。葉空さん起きて〜」

一向に起きる気配を見せない葉空さん。

「む〜。結咲先輩、葉空さん起きません。どうしたらいいのでしょう?」

「ん〜? 玲奈っち、私に任せなさい!」

そう言って葉空さんの耳元で何かを囁く。

「びぎやー!」

いきなりラリリながら葉空さんが起きた。

持つ物は先輩だね。でも、何て言ったか甚だ疑問である。

「先輩。葉空さんに何て言ったのですか?」

気になります。

「ひ・み・つ」

不覚にも可愛いと思ってしまった…。

「さて！」

私が声を張るとみんながこっちを向いてくれた。

「本題に入ります。今回の罰ゲームは何がいいですか？」
ちなみに前は私達の住んでる学区の3周だっけかな？

「なんで神坂が指揮してるの？」

葉空さんが疑問を言った。

「結咲先輩が『怠いからお願い！』だつて」

「だつてやる気が出ない……女の子だもん！」

「そんな、ナンバーワンな感じに言われても…。全く可愛いげ無い
ぐぼふっ…！」

またしても山無さんは無駄な発音により気絶しました。

学習能力が無いのかなあ…。

「ちなみに結咲先輩は何がいいですか？」

「此処にいる全員分のケーキおごってくれれば万事解決！」

「それに決定です！異論のある片はー！？」

もちろん誰もいません。

「それでは、葉空さんと山無さんのお金でケーキを食べようー！！」

『いえーい！！』

ケーキは美味しく頂きました！

いつまでも起きない山無さんのお金オンリーで！

第四話「1円硬貨の原価って約6円なんですよ！知ってました？（後書き）」

ふゝ。神坂さんの能力のモチーフはある少年マンガが元ネタです。
知ってる人いるかな？

第五話「ロリっ娘よりもシヨタっ娘の方が貴重だと思います！どつでもいいです

すみません！

3週間以上も間を開けてしまいました！

こんなクズのような人間にお許しを……！

それに待たせておいてアレなのですが、今回はいつもより500字程度少ないです…。

本当にすみませんでした！

第五話「ロリっ娘よりもシヨタっ娘の方が貴重だと思います！どうでもいいです

「暇だなあ……」

どうも皆さん神坂です。

只今、とてつもなく暇です。今日は土曜日にもかかわらず、誰とも何の約束をしてないので一日中暇になってしまいました。

かと言ってこのまま何もしなのは人生の1日を完全に無駄にしてしまう。なので、

「何かしよう！うん。その方がいい！」

画して、私は暇潰しになりそうな事を片っ端からやるにとした。

.....

その1『勉強』

「よし！今日は苦手な日本史の克服を試よう！」

10分後

「あ……つまんない。逆に鬱になりそう……」

その1『勉強』断念。

.....

その2『ゲーム』

ゲーム機（X・Box）を取り出し、コードを繋ぐ。すべての作業が終わり、「よし！やろう！」と心に決め、電源を入れ、動かそうとコントローラーを操作した。

が、

「げによ〜ん…。コントローラーが使い物にならなくなったの忘れてた…」

今までの努力（準備）っていったい…。

その2『ゲーム』断念。

・・・・・・・・・・・・・・・・

その3『悪戯電話』

「やっぱり最初はこの人でしょう」

アドレス帳を開き、特定の人を探して電話を試みた。

プッププププッ…

ツー、ツー、ツー…

ケータイを叩き割ってやろうと思ったけど、すんでのところぐいとどまる。

「危ない危ない」

ケータイの画面を見ると充電してくださいの文字が書いてあった。

充電が済むまで待たなきゃなあ。

「ハア……」

その3『悪戯電話』保留。

……

その4『お買い物』

外は雨。傘はある。

「よし！着替えよう！」

素早く部屋着から普段着に着替えいざ出発。

傘を取り出し開く。

「……」

開かない。どうやら骨が逝ってるようだ。

その4『お買い物』断念。

……

その5『悪戯電話』再開。

さて、他に何もやる事が無いので充電器を挿したまま電話をすることにした。

良い子はマネしないでね♪

悪戯電話の内容はこうだ。

?特定の人物に30秒おきに電話をする。

?相手が電話に出たら何かを言って、相手の反応を聞く。

?切る。

どうです?完璧な暇潰しになりそうですね。

良い子はマネしないでね♪

初めての相手は決まっているので、すぐに実行に移せた。

ケータイに番号を打ち、相手が出るのを待つ。

プップッププッ……プルルル!プルル……

『はい、もしもし。神坂さん?』

1コール半で出るとは……。さすが委員長。非の打ち所が無い。

さてと、ミッション(暇潰し)スタートといきますか!

第五話「ロリっ娘よりもシヨタっ娘の方が貴重だと思います！どつでもいいです

今回は神坂さんがぐだぐだする話でした！

次回に続きます！

こんな駄文が続きますが、未永く付き合って頂けると幸いです！

第六話「あなたにこの声が届きますように。イタ電だけどね!」(前書き)

やっと書けました!

お待たせしてすみませんでした!

知ってる方も多いでしょうが、実は『Absolute Music』と言う小説を書きはじめたので土日にか執筆できなくなってしまう!

よろしかったらAMも読んでくださいね!

ちなみに珍しくタイトルと内容が一致します。前半だけです…。では、とある少女をお楽しみ下さい!

第六話「あなたにこの声が届きますように。イタ電だけどね！」

『はい、もしもし。神坂さん？』

「あ、もしもし真枝さん？」

出てくれてありがとう真枝さん！

『はい。そうですね？どうかしました？』

でも、さっきのは本題じゃないよ。

「うん。真枝さん今何してる？」

『今は勉強の真っ最中ですよ』

やった！邪魔されると一番イラつく時ゲット！

「そうですね。実はですね…」

真剣さをアピールするために声を少し低くする。

『は、はい…』

空気を読んだのか、真枝さんからも真剣な空気が流れてくる。

くだらない事に付き合わせちゃってすみません！

「今、ものすごく暇なんですよ…」

『はい?』

プツッ

電話を切る。

これから30秒待つ。

.....あゝ、暇だ...

地味に間がデカすぎたかな? 30秒はかなり暇だな。次からは15秒に変えよう。

さてと、30秒経つしまたかけよう!

プップッププッ.....ブルルル!ブルル...

『はい、もしもし。神坂さん? さっきは...』

「今、ものすごく暇なんですよ...」

『え、えと...神坂さん?』

プツッ

電話を(r y

.....さてと、もう少して15秒!

真枝さんには罪悪感が生まれてきたので、謝罪の電話をしよう…。

真枝さん怒ると絶対怖いよ…。

プップップッ…プルルル！

『はい、もしもし。神坂さんさつきからおかしいですよ？』

「真枝さんすみませんでした。暇潰したくて悪戯電話を…」

『いえいえ。大丈夫ですよ。でも、電話なら葉空さんにしてあげて下さいね。葉空さん喜びますよ』

体育の授業のとき着替えを覗いた虫けらか…。↑今だに根に持っている。

「そうですね。そうします。邪魔してすみませんでした」

『いえいえ。それではまた』

「はい。ではまた」

プツッ

さて、じゃあ葉空さんにでもかけてあげようかな。

プップップッ…プルルル！プルルル！プルル…

『はい！もしもし神坂！？はあ…はあ…』

「キモッ！今すぐ死ね！」

プツッ

はぁ…背中がゾクゾクした…

「なんで興奮してるの！？意味わからない！キモチ悪い！」

………

ここからは葉空さん視点です。

ほんの一時間前のこと。とある女の子がナンパされていた。見た目はものすごくかわいい小動物系の子だ。しかし、問題があった。

その女の子が結咲先輩だったのだ。いや、そこは問題じゃない。

その結咲先輩がものすごく変だった。簡単に言えば、結咲先輩が泣いていた。

先輩と目が合った。

「葉空くん助けて…！！」

そう言われたからには助けてあげなきゃいけないな。

俺はナンパ男二人組を睨みつけてやった。そして近づく。

「んだよ…！やんのか！」

二人組の一人がビビりながら言う。

「やはりしねえよ。ただ、その子を返して貰うだけ」

そう言っ て結い咲き先輩の手を取ったとき、火の玉が横を掠めた。

「（まずい…）」

ナンパ男二人組の手には手の平サイズの火の玉があった。つまり、二人組は両方とも発火能力者パイロキネシストと言う事になる。見た感じではレベル2と3だが、レベル4なのに俺の能力じゃほぼ100%勝てない…。理由は後ほど。今は逃げる！地の果てまで！

なんともまあ、カッコ悪い救い方なんだ…。

第六話「あなたにこの声が届きますように。イタ電だけどね!」(後書き)

葉空さんと結咲先輩については次回明かに!?

まあ、少し考えればわかりますが…。

では、また次回を楽しみにして下さいね!

第七話「カラオケの機種はクッソにかざるよね」……PV映像が無いのがたま

さて、先週の続きです！

お楽しみに下さい！

10日〜17日まで母の実家の旅館のお手伝いをする事になった
ので次回の更新は少し遅くなります。

すみません。

第七話「カラオケの機種はク　ッソにかぎるよね」……PV映像が無いのがたま

「…っ！あっつい！」

しまった！火の粉が服に当たった！

急いで服に燃え移った火を消すと、路地裏の奥へと進んだ。

隠れてあいつ等を振り切るしかない。今やることは結咲先輩を助けること。

「（冷静になれ…！冷静になれ俺！）」

とは言うものの、この路地裏にはごみ箱など人が隠れられるものが見当たらない。ハズレだった。このままじゃ自分より低能力者に負ける。

「やっと追い詰めた！」

追い詰められた。

やばいな俺の風圧調整は^{エアロコントロール}発火能力^{パイロキネシス}に対してかなり部が悪い。俺の風圧調整はある意味最弱の能力だからな、簡単に言えば風圧しか調整出来ない。しかも風圧を低くするかと言って低くしても火が消える訳でもない、自分が息苦しくなるだけだ。風圧が調整出来るのは半径15m程度。自由に範囲の調整も出来るが、半径1m以下にはならないらしい。最大風圧は1億N/m²。簡単に言えば風圧だけで小さなクレータが出来るくらい。最小風圧は0.00001N/m²。簡単に言えばハウスダストが触れた1/1000の衝撃くら

い。

何無駄なことまで言ってるんだか…。

「（一対二か…。2、3発は覚悟しなきゃ駄目だな）」

轟、とナンパ男達の手の平で燃える炎。俺はそれだけを見る。

「どうしたよ！さっきから逃げてばかりじゃねえか！」

最初はビビってた奴は、今ではすっかり勝ち誇った様に、どや顔で火の玉を投げてくる。そりゃもう、『どや〜！どや〜！』ってしつこい感じで。

「……」

今気付いたけど、片方無口だな。でも、的確に避けづらいうところをついてくる。やっかいだな。

見える。こいつ等の炎は神坂の鉛筆より格段に遅い。避けることなんて楽勝だ。

「くっ…！なんで当たんねえんだよ！」

ナンパ男の顔に焦りが見えてきた。

「オラア！」

ただの直球。楽々と避けたが嫌な予感がしたから、軌道の先を見た。

結咲先輩が居た。

「いやああああああ!!」

「はああああああ!!」

結咲先輩の悲鳴と俺の驚愕が鳴り響いた。

しかし、その炎が結咲先輩に触れることはなかった。

無口の方が代わりに受けたんだ。言い方を変えれば身代わりになった。一瞬の出来事で俺はぽかんとしていた。

だが、すぐに我に返り無口の方へ駆け寄った。

幸い、火だるまになる前に火は消せた。

「おい!無口!大丈夫か!」

無口はこくりと頷き立ち上がり結咲先輩に向かって一言。

「…大丈夫だった?」

「うん。ありがとう」

そう言って二人は抱き合った。

抱き合った?抱き合った!?!?!はああああ!!?!?

「おい!奏!その美少女とはどうい^{かなで}う関係だ!?!」

そう言ったのはナンパ男なわけで。確かに聞くのも有りだな。

「結咲先輩と無口ってどんな関係ですか？」

『きょうだい
姉弟』

『……ええええええええ！？』

なるほど。それなら無口が庇うわけだ。

それはそうとして…。

「ナンパ男。一発殴らせろ」

「だが断る！！」

そして早速と逃げ出した。

「おい！待て！ここにやろう！！」

・・・・・・・・

「はあ…はあ…。見失った…」

この学区は雨が降ってるらしく、すっかりずぶ濡れになってしまった。

「隣の学区なのに雨降ってるとか無いわ」

「やんやんよにしくてやんよ」

神坂からの電話だ！テンション上がる〜！

「はい！もしもし神坂！？はあ…はあ…」 ↑ 走り疲れてるだけです。

『キモッ！今すぐ死ね！』

プツッ！

ツー、ツー、ツー…

「俺、なんかしたかな……」

最近神坂がツンだよ…。

第七話「カラオケの機種はクッソにかぎるよね」……PV映像が無いのがたま

新規キャラクター紹介？

・結咲 奏 ゆいさき かなで

・秋雨 亮二 あきさめ りょうじ

二人目は言わずとも分かりますが、ナンパ男です。

ちなみに、後書きの有効活用のため＋読者の皆さんが『とある少女は強能力者（レベル3）』をもっと楽しめるように、質問コーナーみたいなのを考えました！

「あのキャラの容姿ってどんな感じ？」とか「あのキャラのイメージボイスは？」とか、どしどし募集します！感想とかメッセージで言ってくれば出来ることなら何でも答えます！

どうかこの企画にご協力下さい！皆さんの感想楽しみに待ってます！

第一回「とある少女達の放課後ラジオ！」（前書き）

最近の流れに便乗してラジオ形式にしました。

本編をより楽しめるように考えた企画なので是非読んで下さい！

第一回「とある少女達の放課後ラジオ！」

みずき「さて！皆さん今日から始まります『とある少女達の放課後ラジオ！』楽しんで聞いて下さい！」

ゆきこ「あの…姉ちゃん？たしか、後書きだけでやるんじゃないの？……」

みずき「それがね。どうしても長くなっちゃって1000字じゃおさまりきらなかったの！でも大丈夫！二回目からは後書きだけでやるから！」

ゆきこ「へー。その低スペック携帯どうにかならないの？」

みずき「ダメっ！確かに使いにくいけど、もうかれこれ2年4ヶ月も使ってるんだから！いまさら買い替えるなんて可哀相だよ！」

ゆきこ「は、はあ…。まあいいや。皆さん始めまして。なろうに居る作者さん、桜 みずきのリアル弟をやってる『ゆきこ』といいます」

みずき「ぷぷっw！女の子みたいな名前www」

ゆきこ「（ギロツ！）」

みずき「あ、いや、何でもないです…。さて、フリートークはこの辺にして本題に行きますかね。そうそう。ゆきちゃんはなろうに入らないの？」

ゆきこ「本題に入るんじゃないかなかったんかい！まあ、入りたいが書く

時間は勉強とか趣味に打ち込みたい。姉やんみたいに頭良くないし、成績良くないし」

みずき「そっかあ…。残念だ…」

ゆきこ「でも、ゆとりが出来たら入るわ」

みずき「まあ、そんなどうでもいいことは置いて本題に入りましょう」

ゆきこ「……」

みずき「あれ？ゆきちゃんどつたの？」

ゆきこ「いや、何でもねえよ…」

みずき「??で、では質問コーナーに入ります！と言っても質問コーナーしか設けてませんが。最初の質問！天城さんからいただきます！『出演キャラのイメージキャラボイスは考えていますか？』とのことで、昨日即興で考えました！」

ゆきこ「なあ、姉やん。このラジオもどきに俺は必要なのか？」

みずき「ゆきちゃん何言ってるの！？必要に決まってるじゃん！ていうかさつきから全然話が進んでないよ！ゆきちゃん少し黙って！」

ゆきこ「……帰る」

みずき「ダメ！」

ゆきこ「こんな姉弟喧嘩聴いてて楽しめる人居るの!？」

みずき「居るよ!……きつと」

ゆきこ「ダメじゃん……」

みずき「とりあえず話を進めよう。まずはそこからだね」

ゆきこ「んじゃ帰……あれ?何じゃこりゃああああ!」

みずき「あ、帰らないように縛つとききました」

ゆきこ「いつの間に!？」

みずき「ついさつきスタッフさんに『気づかれないように縛っておいて』ってメール送信したの」

ゆきこ「くっ!商業科だから見なくても携帯使えましたねそういえば!」

みずき「では、質問コーナー再開♪各々のキャラクターのキャラボイスは次の通りです!

神坂 玲奈
こうざか れいな

CV: 田村 ゆかり

葉空 蒼依
よぞら あおい

CV: 鈴村 健一

真枝 実乃梨
まえた みのり

CV：水樹 奈々

結咲 理琉 ゆいさき みさる

CV：堀江 由衣

山無 嘉秋 やまなし よしあき

CV：山口 勝平

結咲 奏 ゆいさき かなで

CV：悠木 碧

秋雨 亮二 あきさめ りょうじ

CV：阪口 大助

以上です！

ゆきこ「はいはいよく出来ました」

みずき「えへへ／＼／＼」

ゆきこ「馬鹿にしたんだけど」

みずき「あはははゝゝ…タヒね！」

ゆきこ「今の時代にその言葉はどうかと思うんだけど…」

みずき「あ、そろそろ時間だね」

ゆきこ「休憩時間終了のな。それより姉やん昼飯食べなくてよかったの？つぎは22時まで休憩ないけど」

みずき「しまった！あと5分もない！！ゆきちゃんが途中で帰る連呼したから時間がかっちゃったじゃん！」

ゆきこ「自業自得」

みずき「私の弟がこんなに冷たいわけがない！」

ゆきこ「注）冷たいです」

みずき「酷い！」

ゆきこ「自業自得」

みずき「はい！皆さん申し訳ありません！時間により、質問コーナーの質問が1つしか答えられませんでした！次回は2つ以上答えられるように努力します！どうかこれからもよろしくお願いします！」

ゆきこ「よろしくお願いします」

みずき「では皆さんまた会いましょう！バイバイ！」

ゆきこ「ではまた」

ゆきこ「あれ？姉やん何処行くの！？この縄解いて！」

みずき「頑張つて！あなたの姉はこんなにも冷たいです」

バタンツ！

みずき『トッポ食べればなんとかもつかな？最後までチョコたっぷりだし！』

ゆきこ「誰か助けて……」

ゆきちゃんは3分後に自力で脱出したらしいです。

第一回「とある少女達の放課後ラジオ！」（後書き）

みずき「次回のゲストは神坂さん！」

ゆきこ「俺をパーソナリティから降ろしてくれない？」

みずき「ダメ！！皆さん！とある少女に対する疑問や質問を受け付けているので、じゃんじゃん言っちゃて下さい！ではまたの機会を！！！」

ゆきこ「本気で俺は必要なのか？甚だ疑問だ……」

第八話「最近、時間が経つのが遅く感じて嫌になる…」(前書き)

今回から後書きには『とある少女達の放課後ラジオ』があります。

では、本編をお楽しみ下さい！

第八話「最近、時間が経つのが遅く感じて嫌になる…」

神坂さん視点に戻ります。

気が付くと雨が止んでおり、部屋着から着替えたままだったので
買い物へと近所のスーパーに足を運んでいた。

何かいいものはないかと探していると、一つの商品が目に入った。

「10個入りの卵が……1パック52円……!!」

絶対おかしいでしょ！安すぎるでしょ！怪し過ぎて誰も買わない
よ！買うけど…。

2パックをカゴの中へ。うん。今日の夕飯はちょっとだけ贅沢に
しよう。

他にも玉葱、人参、赤パプリカを一つずつと鶏モモ肉100g、
業務用フライドポテト2kg（2袋）を買い（お会計988円）、
帰路についた。

家に着き時間を確認する。

「午後5時半か。今から作るにも早過ぎるよね…。そして何か忘れ
てるような……。いないような…。」

私は何かを忘れていた。それを思い出せば苦労はしないのだが
…。

とりあえず暇潰しと言つ名目で散歩をすることにした。

.....

「まことにありがとうございました」

ふゝ危なかった。今日は兄がやってるバンドのデビューシングルの発売日だった。気づいてよかった。

「早速家に帰って飾ろ」

そう。私は買ったCDは聴くんじゃなくて飾る。聴くならi o dで十分だからだ。

私が上機嫌でるんたるたと歩いていると、柄の悪い大人達にに捕まった。いや、柄の悪いは少し違う。いかにも「悪人です」と言わんばかりの怪しい人達だった。

「え？ちよつと！なんですか！？」

「神坂 玲奈だな！ついて来てもらうぞ！」

捕まえてから本人確認しないで下さい。もし人違いだったらどうするんですか。まったくもう…。

「はい？誰ですかそれっ！人違いです！放して下さい！」

ちなみに私は大人に対して平気で嘘を吐きます。

「くだらねえ嘘を吐くな！こつちには顔写真があんだよ！あんま抵

抗すると痛い目にあわずぞ！」

どこかに打撃力のある軽いものを目で探したが見つからず、近くに駐車してあった黒いバンに乘せられ、どこかへ連行された。

・・・・・・・・・・・・・・・・

ここからは葉空さん視点です。

フラれた……いや、告白した訳じゃないけど……。

「キモいか…俺、キモいのか…」

そんな感じに黄昏れていた。家に帰る気がしない…。失恋てキツイな。

「はい？誰ですかそれっ！人違いです！放して下さい！」

不意に神坂の声がしたので周りを見渡した。

「くだらねえ嘘を吐くな！こっちは顔写真があんだよ！あんま抵抗すると痛い目あわずぞ！」

俺は犯人のあまりにも大胆な行動に呆気をとられた。まだ日があるというのに街中で神坂を誘拐しているのだ。その誘拐現場を見て呆然と立ち尽くしていた。

「これって現実だよな…」

第八話「最近、時間が経つのが遅く感じて嫌になる…」(後書き)

みずき「第二回とある少女達の放課後ラジオ!!」

ゆきこ「今回もまた茶番が始まります。ぶっちゃけ姉がうざったらしくたらとしゃべるだけなのでスルーしちゃってけっ」 〃殴

みずき「しちゃだめ!なにゆきちゃん煽ってんの!?!」

ゆきこ「俺忙しいし。姉やんみたいに大学を推薦できる立場じゃないの。頭悪いの。勉強しなきゃいけないの」

みずき「じゃあ、大学行かなくていいじゃん!」

ゆきこ「よくねーよ!」

みずき「ふっ!これ以上言い争っても無意味だね!ゲストを紹介します!神坂さん!スタジオへどうぞ!」

.....

ゆきこ「来ないな」

みずき「しまったあ!仕事の疲れで呼ぶ日にち間違っちゃってた」

ゆきこ「死ねよ。なんで生きてんだよ」

みずき「なにをっ!!ゆきちゃん!は旅館の接客したこと無いからそんなこと言えるんだよ!」

ゆきこ「だから言ってるんだよ。ちなみに、もう時間を半分使ってるぞ。このラジオの番組時間約2分だからな」

みずき「おっと、じゃあ恒例の質問コーナー！」

ゆきこ「しかないけどな」

みずき「オル先輩からの質問！『簡単なプロフでも書いてみたらどうですか？』とのことで！発表します！」

ゆきこ「実は載せるタイミングを逃してプロフを載せることができなかったのはここだけの秘密」

みずき「じゃあ発表します」

ゆきこ「やっぱ俺いらなくね！？」

みずき「我らが『とある少女』の主人公！神坂さんのプロフです！

身長

・ 153 cm

体重

・ 45 kg

血液型

・ AB型

誕生日

・ 7月7日

以上です！」

ゆきこ「んじゃ次よく主人公と間違えられる葉空のプロフです。立ち位置はメインヒーローです。

身長

・ 177cm

体重

・ 62kg

血液型

・ A型

誕生日

・ 9月18日

まあこんな感じ」

みずき「もう時間だ…」

ゆきこ「また次回」

みずき「終わり方がぬるい！」

ゆきこ「じゃあどうするよ？」

みずき「ゆきちゃんなんか一発芸やりなよ」

ゆきこ「俺!？」

みずき「なんかあるでしょう?」

ゆきこ「パーソナリティのゆきこと…」

みずき「みずきでしたっ！って！終了の合図じゃん！なにや
」

文字制限によりここで終了です。次回もよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6228t/>

とある少女は強能力者(レベル3)

2011年10月8日17時10分発行